

十三詣り（じゅうさんまいり）

十三詣りは、数え年^{さい}※で 13 歳になった子どもたちが、茨城県東海村や福島県柳津町などにある虚空蔵さまにお参りに行くしきたりのことです。

子どもから大人になるための大切な行事といわれており、「智恵詣り」や「知恵貰い」などといわれています。

※数え年＝生まれたときには 1 歳で、次の正月が来ると 1 歳増えるという数え方。

〈十三詣りの説明〉

十三詣りは、知恵と福德を備え持つ虚空蔵菩薩に「一代開運」をお祈りすることです。

数え年の 13 歳は生まれ年の干支が初めて戻ってくる、いわば「十二支の還暦」にあたります。この歳は男女とも人生最初の厄年であり、同時に、身も心も大人に生まれ変わる大切な年齢です。昔はこのころから心身ともに成人らしくなるということで、このとき初めて大人用の着物を作ってもらい、女子は「本身祝い」、男子は「元服祝い」、「若衆入り」をしました。

十三詣りをする地域は、特に栃木県東部の八溝山麓地方に色濃く残っています。

茂木町や旧烏山町（現那須烏山市）では、舟に乗って那珂川を下り、お参りに行ったと伝えられています。

東海村の村松山の虚空蔵さまの境内で売られている菓子 13 個を食べると、福德知恵が授かるという言い伝えもあります。



むらまつやまこくそうどう
村松山虚空蔵堂 本堂（茨城県東海村）

～とちぎ人の想い～

十三詣りは、お参りしたことしか覚えていませんが、こうした記憶があることは、私が健康で幸せに成長するように家族がひたすら祈ったからだと考えています。親や家族の心を懐しく思い出すことで、ありがたくも幸せな気持ちになります。

子どもへの思いが
伝わってくるまる。
「幸せな気持ち」に
なるまる～。

